Hirao School of Management Review (2018), Vol.8 pp.1-17.
調査報告 (Research report)

Hirao School of Management Review　第 8 巻

甲南大学マネジメント創造学部（CUBE）卒業生 5 年間調査結果の概要（2013 年卒から 2017 年卒まで）

前田正子*

【要旨】

2009 年に開設された甲南大学マネジメント創造学部（以下 CUBE）では 2013 年に初めての卒業生を出しだが、その後継続して毎年、卒業前に大学生活や就職活動に関するアンケート調査を実施している。本稿では調査の中の大学生活に関するデータを使用し、この 5 年間の卒業生の成績や大学教育への取り組み、自己成長への評価や将来の進路決定にあたって大学の授業が影響があったかどうかや、学部での学びや経験への満足度などを単純集計した。本稿はこの 5 年間の学生の学びの全体像を把握するために、5 年間の卒業直前調査をとりまとめたものである。将来の進路を考えるにあたって、学生たちはプロジェクトや卒論といった授業の影響があったと答えている。さらに卒業生の 9 割近くが「満足」「どちらかと言えば満足」と答えており、学部への満足度は高い。また学部で学んでよかった点への自由記述をみると、「少人数教育で教員との距離が近い」「プロジェクトでは自分で考えて発表をしなくてはならず、受け身にならないのが良い」ということが多く記述されており、CUBE の目指した少人数教育が学生に一定の満足をもたらしていることが分かる。

【キーワード】

授業参加、能力向上感, 満足度、プロジェクト型学習、少人数

* Hirao School of Management, Konan University

1. はじめに

マネジメント創造学部（以下、CUBE と称する）は甲南大学創立 90 周年記念事業として 2009 年に開設された新設学部である。この学部では、新しい大学教育の形を模索するために、少人数教育を基本とし、幅広く学び教養の基礎を培うことを目指して、ゼミ形式をとっていない。代わりに半年ごとに選択するプロジェクト型学習(一つのテーマについて少人数で深く学ぶ授業)を履修する。その後、4 年次になってから指導教員を決め、1 年間かけて自分の決めたテーマで卒論を書くこととなっている。

またフィールドワークやインターンシップも学部で提供し、教室の外での学びも重視するだけでなく、さらに大学の制度を利用して留学することも奨励している。それでは、こういった新しい学部の試みは学生たちにとって、どういった学びの経験をもたらしたのだろうか。また学生たちは自己成長の実感を持つことができたのだろうか。

そこで、卒業直前の 4 年生を対象とした調査を実施し、学生の授業への取り組み状況や自己成長への評価、また学部への満足度などについて探ることとした。調査は 2013 年 3 月に 1 期生として卒業した最初の卒業生から 2017 年 3 月の 5 期生まで継続して実施されている。また調査では就職活動についての振り返りや就職先などについても聞いているが、この稿では主として、大学での学びについての回答について取り上げて集計する。

2. データ

今回の分析に利用するデータは 2009 年に設立された CUBE の卒業生である。CUBE では 2013 の 3 月から 2017 年 3 月までに 5 回の春の卒業生を出した。3 月時点での卒業確定者に学部教育への評価や就職活動についてのアンケート調査を実施しており、この 5 年分の卒業生のデータを使用する。調査期間は卒業判定発表の日から卒業式までの間である。CUBE の場合、190 人強が入学し、4 年間の中退率は 5%程度、留年率は 10%程度となっている。まず図表 1 には実際の卒業生の人数と進路についてまとめた。9 月の秋卒業の者も毎年 5，6 人はいるがこの表 1 には含まれていない。

図表 1　各年の 3 月の卒業生の人数と進路

卒業年	就職希望者	内定者	未内定者	大学院進学・留学等	その他＊	卒業生総数
2013 年	170	169	1	4	4	178
2014 年	145	144	1	6	7	158
2015 年	167	161	0	4	2	167
2016 年	170	169	1	4	4	178
2017 年	172	171	1	2	5	179

＊その他にはアルバイトや公務員試験を目指す者などが含まれる

図表 2 には、各年度の卒業生調査の回答者数及び、男女別比率をまとめた。各年度の調査に回答した学生は計 813 人（男子 340、女子 473）となっている。回答率が最低だったのが 2015 年の 92%、最高は 2017 年の 97%である。つまり、この卒業生調査には、各年、9 割以上の卒業生が回答している。甲南大学でみた場合、経済学部は女子が約 3 割、経営学部は女子が 5 割弱であるのに比べ、CUBE は経済・経営系の学部であるにも関わらず、そもそも女子学生が過半数を占めている。またアンケートなどにも女子学生の方が答えてくれるため、回答者比率も女子が多くを占めている。以下、回答の集計結果を報告する。

図表 2　卒業生調査に回答した男女別学生数

卒業年	男子	女子	卒業生総計	男子比率	女子比率
2013	73	96	169	43.2%	56.8%
2014	71	78	149	47.7%	52.3%
2015	57	96	153	37.3%	62.7%
2016	78	90	168	46.4%	53.6%
2017	61	113	174	35.1%	64.9%
総計	340	473	813	41.8%	58.2%

３．集計結果

(1)CUBE に来てよかったか

それでは、最初に CUBE で学んでよかったか、総体としての学生の評価についてまとめてみよう。実はこの質問は 2015 年 3 月卒業生からしか聞いていないため回答は 2015・16・17 年卒の 3 年分しかない。結果は図表 3 にまとめた。そうすると比率でみると、「満足」「どちらかというと満足」が 2015 年で 87.2%、2017 年で 89.5%と、約 9 割の者が満足していることが分かる。調査に回答した 2015･16･17 年の 3 年間の卒業生、計 495 人のうち、不満だったのはわずか 11 人である。それでは以降、細かく学生の状況を見ていこう。

図表 3　CUBE に来てよかったか

卒業年		満足	どちらかと言えば満足	どちらでもない	どちらかと言えば不満	不満	人数計
2015	人数	90	47	13	2	5	157
2016		108	35	17	3	3	166
2017		108	46	14	1	3	172

2015	比　率（%）	57.3	29.9	8.3	1.3	3.2	100
2016		65.1	21.1	10.2	1.8	1.8	100
2017		62.8	26.7	8.1	0.6	1.7	100

（注）比率は四捨五入しているため必ずしも計は 100 にならない

(2)どのような志望動機や入試だったのか

それではまず、CUBE が第一志望であったかどうかを見てみよう。結果は図表 4 にまとめた。選択肢は 3 つで、1.第一志望、2.他国公立大志望、3.他私立大志望である。これを見ると、第一志望者比率が最初の 3 年は 5 割を超えていたものの、17 年卒では 5 割をきっていることや他私立大が第一希望だった者が増えてきていることが分かる。

図表 4　CUBE が第一志望かどうか

卒業年	第一志望	他国公立志望	他私立大志望	回答者数
2013	55.1%	18.0%	26.9%	167
2014	61.5%	6.8%	31.8%	148
2015	54.2%	20.0%	25.8%	155
2016	46.1%	16.2%	37.7%	167
2017	46.0%	12.5%	41.5%	176

図表 5 はどの入試で入学したかについての回答である。一般入試が半分であり、指定校推薦が約 2 割ということが分かる。甲南高校の場合は AO や指定校推薦など、様々なルートで入学してくるので、それぞれ自分の入試を選択しているが、参考までに甲南高校出身者の人数を表に掲載した。

図表 5　どの入試で CUBE に入学したか

	一般入試	AO 入試	公募制推薦	指定校推薦	その他	参考（甲南高校出身人数）	
2013	54.4%	10.1%	11.2%	22.5%	1.8%	不明	169
2014	44.2%	14.3%	14.3%	18.4%	3.4%	13	147
2015	43.9%	14.8%	11.6%	29.7%	0.0%	13	155
2016	58.7%	8.4%	9.0%	21.5%	3.0%	12	167
2017	50.6%	9.3%	16.3%	21.5%	2.3%	15	172

（注）「その他」については回答者によって解釈が違い、「後期入試」や「分からない」者が選択している。

それでは、学生たちは志望大学を決めるうえで、どのようなことを重視してきたのだろうか。そこで、「a.両親の意向を考慮した」、「ｂ.学校や塾・予備校の先生の勧めに従った」、「ｃ.自分の成績・学力を考慮した」、「ｄ.卒業後に就きたい仕事を考慮した」、「e.将来自分がやりたいことが見つかると思った」、「f.とりあえず大学に進学してみようと思った」という事柄に関して、「1.よく当てはまる」、「2.ある程度当てはまる」、「3.あまり当てはまらない」、「4.全く当てはまらない」という４つの選択肢を選んでもらった。結果を図表 6 にまとめてみた。

図表６　志望大学を決めるうえで重視した事柄

a.両親の意向を考慮した

	人数				割合（%）					人数
A.	1	2	3	4	1	2	3	4	1+2	計
2013	35	64	39	30	20.8%	38.1%	23.2%	17.9%	58.9%	168
2014	29	57	37	26	19.5%	38.3%	24.8%	17.4%	57.7%	149
2015	33	62	39	25	20.8%	39.0%	24.5%	15.7%	59.8%	159
2016	29	72	37	29	17.4%	43.1%	22.2%	17.4%	60.5%	167
2017	31	72	42	25	18.2%	42.4%	24.7%	14.7%	60.6%	170

b.学校や塾・予備校の先生の勧めに従った

	人数				割合（%）					人数
b.	1	2	3	4	1	2	3	4	1+2	計
2013	7	46	38	78	4.1%	27.2%	22.5%	46.2%	31.4%	169
2014	14	29	44	59	9.6%	19.9%	30.1%	40.4%	29.5%	146
2015	12	48	39	60	7.5%	30.2%	24.5%	37.7%	37.7%	159
2016	16	50	40	60	9.6%	30.1%	24.1%	36.1%	39.8%	166
2017	25	56	32	56	14.8%	33.1%	18.9%	33.1%	47.9%	169

c.自分の成績・学力を考慮した

	人数				割合（%）					人数
c.	1	2	3	4	1	2	3	4	1+2	計
2013	56	83	17	13	33.1%	49.1%	10.1%	7.7%	82.2%	169
2014	52	57	24	14	35.4%	38.8%	16.3%	9.5%	74.1%	147
2015	40	89	17	12	25.3%	56.3%	10.8%	7.6%	81.6%	158
2016	48	83	20	16	28.7%	49.7%	12.0%	9.6%	78.4%	167
2017	59	79	18	13	34.9%	46.7%	10.7%	7.7%	81.7%	169

d.卒業後に就きたい仕事を考慮した

	人数				割合（%）					人数
d.	1	2	3	4	1	2	3	4	1+2	計
2013	24	43	46	55	14.3%	25.6%	27.4%	32.7%	39.9%	168
2014	25	42	48	32	17.0%	28.6%	32.7%	21.8%	45.6%	147
2015	17	61	42	39	10.7%	38.4%	26.4%	24.5%	49.1%	159
2016	30	36	52	49	18.0%	21.6%	31.1%	29.3%	39.5%	167
2017	29	51	56	32	17.3%	30.4%	33.3%	19.0%	47.6%	168

e.将来自分がやりたいことが見つかると思った

	人数				割合（%）					人数
e.	1	2	3	4	1	2	3	4	1+2	計
2013	62	71	19	17	36.7%	42.0%	11.2%	10.1%	78.7%	169
2014	54	58	21	12	37.2%	40.0%	14.5%	8.3%	77.2%	145
2015	59	64	22	14	37.1%	40.3%	13.8%	8.8%	77.4%	159
2016	55	63	29	19	33.1%	38.0%	17.5%	11.4%	71.1%	166
2017	51	82	26	10	30.2%	48.5%	15.4%	5.9%	78.7%	169

f.とりあえず大学に進学してみようと思った

	人数				割合（%）					人数
f.	1	2	3	4	1	2	3	4	1+2	計
2013	49	60	27	33	29.0%	35.5%	16.0%	19.5%	64.5%	169
2014	47	51	29	22	31.5%	34.2%	19.5%	14.8%	65.8%	149
2015	46	64	28	21	28.9%	40.3%	17.6%	13.2%	69.2%	159
2016	61	58	24	24	36.5%	34.7%	14.4%	14.4%	71.3%	167
2017	50	66	36	17	29.6%	39.1%	21.3%	10.1%	68.6%	169

（注）比率は四捨五入しているので総計が必ずしも 100 にならない

表の一番右は回答者数計、右から 2 番目は 1.よく当てはまる、2.ある程度当てはまる、と答えた者の割合を足したものである。1 と 2 の足した割合が最も大きなものから見てみよう。そうすると「c.自分の成績・学力を考慮した」と答えた者が 8 割以上と最も考慮している。次に多いのは、「e.将来自分がやりたいことが見つかると思った」が 8 割弱となっている。次いで多く選択されているのが「f.とりあえず大学に進学してみようと思った」が 7 割弱である。つまり、将来自分がやりたいことを見つけるために、とりあえず大学に進学し、大学は自分の学力で入れる中から選択した、ということであろう。だが、選択に当たっては 6 割の学生が両親の意向を聞いている。

さらに最近、急速に伸びているのが「b.学校や塾・予備校の先生の勧めに従った」ということである。実は他の選択肢は卒業年別に見ても統計的な有意差は認められないが、「b.学校や塾・予備校の先生の勧めに従った」は最近、増えてきていることが統計的にも有意に認められる。この CUBE の場合、学部も小さく、広く社会にその存在を知られているわけでもない。学生に選択肢としてもらうためには、まずは高校や予備校への広報が必要だと思われる。

(3)大学の授業にどのように取り組んだのか

それでは学生たちはどのように授業に取り組んだのだろうか。今回の調査では、授業に対する取り組みについての自己評価も聞いている。授業の取り組み姿勢について 9 つ尋ね、それぞれ「当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の 4 段階の選択での回答である。

9 つの質問は「a.授業内容について教員に質問をする」、「b.授業中のディスカッションに参加する」、「c.授業の予習や復習をする」、「d.授業の発表のために時間をかけて準備する」、「e.卒業論文の作成を一生懸命頑張った」、「f.期末テストやレポートの準備もきちんとする」、「g.板書されていない内容もノートに書き写す」といったことである。

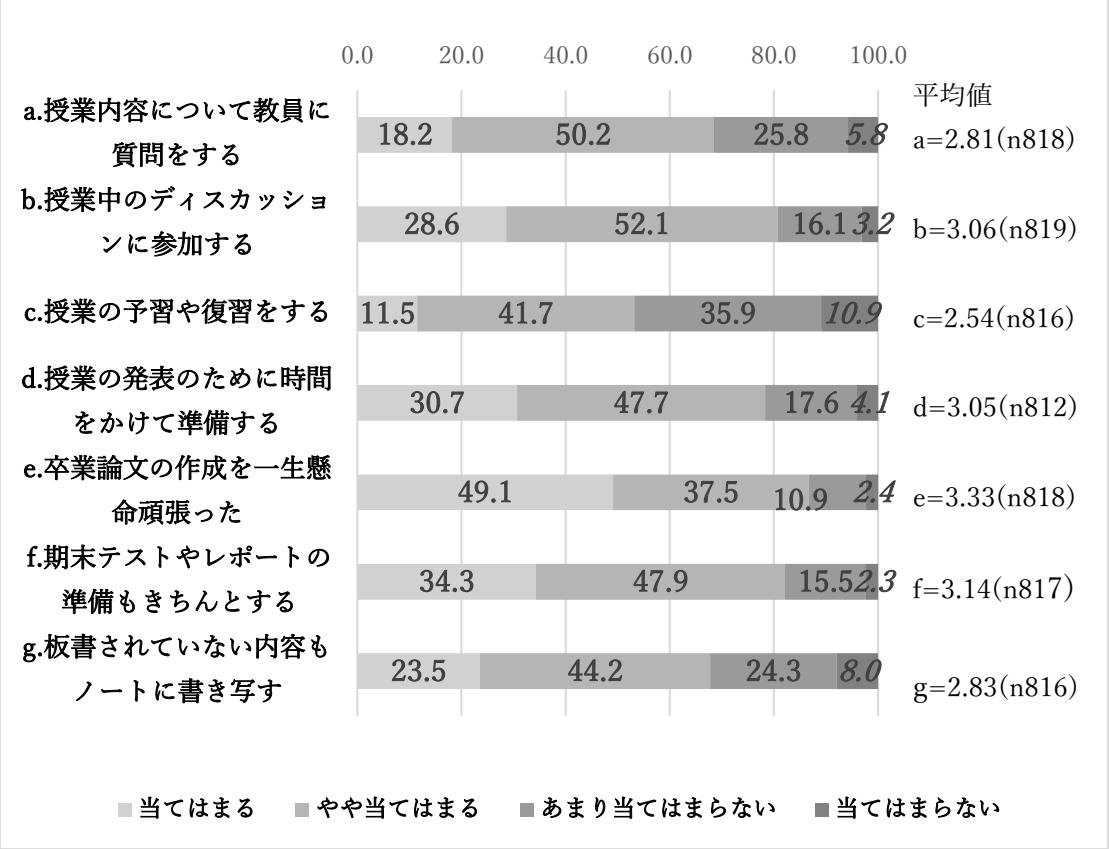
これは卒業年によっての差があるのは一つだけである。「f.期末テストやレポート」について、2014 年卒のみ、2013 年卒に比べて取り組み状況が良くなかったという点であり、後の授業への取り組みは、どの学年の状況も差がない。

取り組み状況の分布は図表 7 にまとめた。また、「当てはまる」＝4 点、「やや当てはまる」＝3 点、「あまり当てはまらない」＝2 点、「当てはまらない」＝1 点として、取り組み得点を作成してみた。この場合、「当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」が同じ分布だとすると、取り組み得点の平均値は 2.5 となる。

最も高い 3.33 という高い平均値を示しているのは、「e.卒業論文の作成を一生懸命頑張った」ということである。これが「当てはまる」者が 49.14%、「やや当てはまる」が 37.53%であり、合わせて 9 割近い学生が卒論執筆には一生懸命頑張ったと答えている。前述したとおり卒業年によって差はなく、どの卒業年の学生も、最も取り組み得点が高いのはこの「卒論作成」である。CUBE では卒論作成を全学生に課しているが、個人で最後まで完成させなければならないことが、その背景にあるのかもしれない。

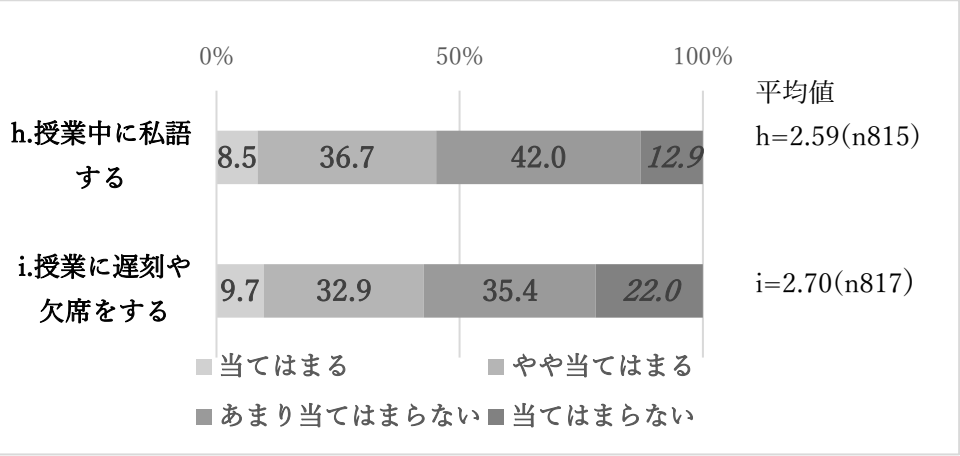
一方、取り組み得点の平均値が低いのが「c.授業の予習や復習をする」ということで、2.54 である。これをみると「当てはまる」者が 11.52%、「やや当てはまる」が 41.67%で合わせて 5 割強である。また、授業に対してネガティブな行動、「h.授業中に私語する」「i.授業に遅刻や欠席をする」ということはどうだろうか。これはこの行動が当てはまるほど、授業取り組みがネガティブであるため「当てはまる」＝1 点、「やや当てはまる」＝2 点、「あまり当てはまらない」＝3 点、「当てはまらない」＝4 点として平均点を算出した。

図表７　授業への取り組み状況の分布



つまり平均点が上がるほど、そういったネガティブな行動はとっていない、ということになる。分布について図表８にまとめた。残念なことに「h.授業中に私語する」が「当てはまる」が 8.47%、「やや当てはまる」が 36.69%である。

図表８　授業中の私語や遅刻について



(4)大学で自分の能力はどの程度伸びたか

次に卒業生たちが、こういった大学での学習を通して、自分たちにどの程度の力が付き、能力が向上したと考えているかについて見てみよう。能力向上感については 8 つの質問をしている。「a.自分の主張について根拠に基づいて関係な文章を書く能力」、「b.自分の考えや意見を人にわかりやすく伝える能力」、「c. 1 つの物事を複数の視点から考える能力」、「d.文献や資料を読み解く能力」、「e.必要な文献や統計資料を探す能力」、「f.課題を数量的に分析する能力」、「g.外国語の能力」、「h.異文化を理解する能力」である。これらについて、「向上した」=4 点、「どちらかといえば向上した」＝3 点「変わらない」＝2 点、「低下した」＝1 点として自己評価を聞いた。実はこの平均値は 2013 年卒が最も高い。そこで、卒業年ごとに平均値をとってみた。それぞれの能力評価得点の横に＊がついているものが、2013 年卒業生の平均点より、有意に低いものである。だが、差異を示すものはそれほど多くなく、どの卒業年でも自己能力への評価は安定しているといえる。

そこで、図表 9 には 5 年間の総卒業生の能力獲得の評価得点の平均も総計のところに掲載している。例えば「a.自分の主張について根拠に基づいて関係な文章を書く能力」（能力獲得得点平均値 3.22)、「b.自分の考えや意見を人にわかりやすく伝える能力」(3.22)、「c. 1 つの物事を複数の視点から考える能力」(3.24)、「h.異文化を理解する能力」(3.22) などは学生自身が自分の能力が向上したと、高く評価している。一方、自己評価が低いのが「f.課題を数量的に分析する能力」と「g.外国語の能力」である。

図表９　大学で向上した知識や技能への自己評価（卒業年別）

	a. 文章を書く能力	b. 考えを伝える能力	c. 複数の視点	d. 読み解く能力	e. 資料探索能力	f. 数量的分析能力	g. 外国語能力	h. 異文化への理解
2013	3.4	3.33	3.38	3.18	3.23	2.95	3.04	3.35
2014	3.2	3.23	3.17*	2.96*	3.12	2.92	2.82	3.04**
2015	3.13**	3.13	3.19	2.99	3*	2.85	2.82	3.22
2016	3.25	3.22	3.2	3.11	3.12	2.83	2.92	3.21
2017	3.13*	3.18	3.23	3.06	3.11	2.96	2.97	3.24
総計	3.22	3.22	3.24	3.06	3.12	2.90	2.92	3.22

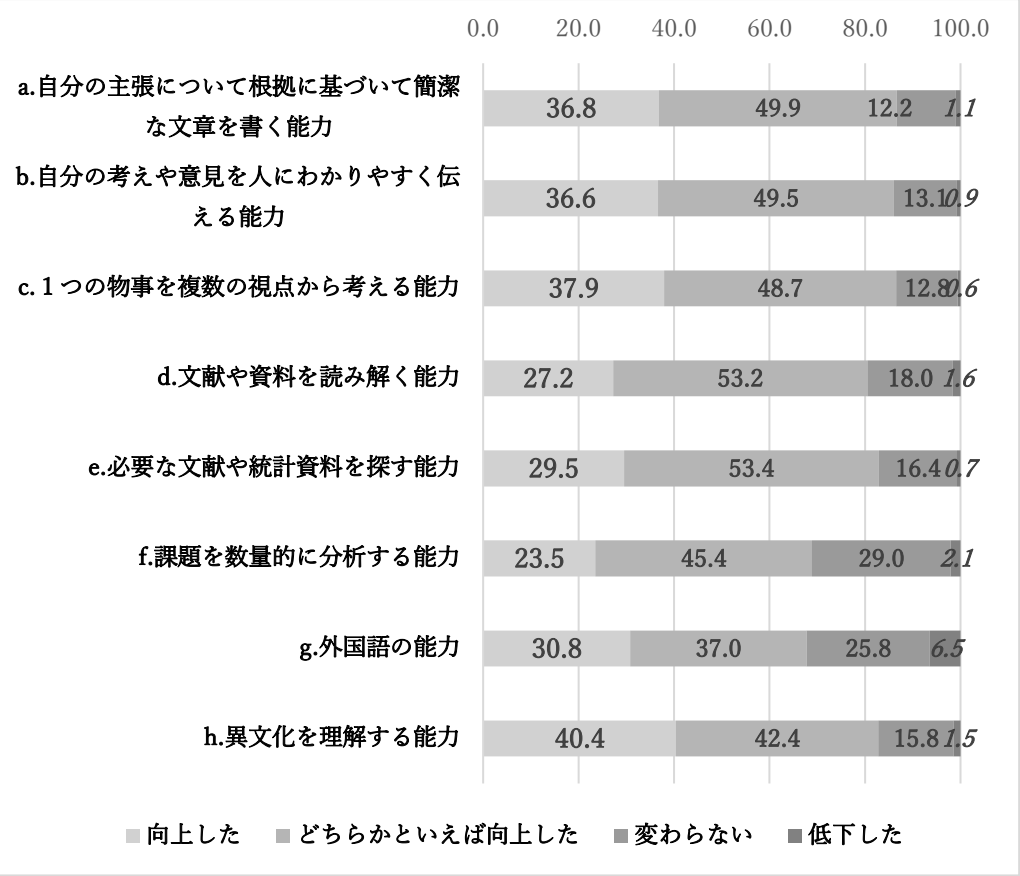
(注)＊は 2013 年の卒業生に比べて有意に平均値が低いもの

また、この自己評価がどのように分布しているのかを見たのが図表 10 である。例えば、「a.自分の主張について根拠に基づいて関係な文章を書く能力」は「向上した」という者が 36.8%、「どちらかと言えば向上した」が 49.9%と、合わせて約 87%である。「b.自分の考えや意見を人にわかりやすく伝える能力」では同順で 36.6%と 49.5%で合わせて約 86%、「c.

１つの物事を複数の視点から考える能力」は 37.9%と 48.7%で、合わせると約 87%となる。だが、「f.課題を数量的に分析する能力」は、23.5%と 45.4%と合わせて約 69%しか向上したと評価していない。私立文系学部であるため、高校で数学を十分勉強せず、苦手意識をもったまま大学を過ごした者がいるのだろう。1 年生では必修で数学的論理思考という授業があり、大学で学ぶのに必要な数学的な知識を持たせるようにしているが、この数学的理解力に関しては学生間の理解度の差が大きい。高校までの基礎学力の問題もあろう。

また同じように「g.外国語の能力」も 30.8%、37%で合わせて約 68%は向上したとしているが、3 割強は能力が向上したとは考えていない。CUBE の場合、留学する者も多いが、それ以外の者の場合、必修の英語クラスは 2 年時の前期で終わってしまう。その後も勉強したければ、英語で開講されるプロジェクトの授業やネイティブ教員と話せるイングリッシュオンリーゾーン、ピッツバーグ大学からの短期留学生との交流、海外フィールドワークなど、チャンスはいくらでもある。また卒論を英語で書くことも可能である。だが、このようなチャンスをつかんで自ら努力するかどうかは本人次第でもある。本人が自ら学ぼうとしない限り数量的分析能力にしても英語能力にしても伸びようがない。学生には自主性に任せるより、強制しない限り自ら学ぼうとしない者がいることも確かであろう。

図表 10　大学で向上した知識や技能への自己評価の分布



また次に男女別に能力獲得の自己評価をみてみた。そうすると実は、どの得点を見ても男子の方が女子より高くなっている。この男女差は統計的に有意な差となっている。それでは、実際に成績も男子の方が女子より良いのだろうか。GPA は学習の成果、つまりどの程度学んだかということへの客観的な評価でもあるからだ。

図表 11　能力獲得の自己評価平均点の男女別

	文章を書く能力		考えを伝える能力		複数の視点		読み解く能力		資料探索能力	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
	3.33	3.15	3.3	3.16	3.35	3.17	3.15	3	3.22	3.04
回答者数	340	474	340	475	340	474	340	475	340	473

数量的分析能力		外国語能力		異文化への理解	
男子	女子	男子	女子	男子	女子
3.02	2.82	2.92	2.93	3.18	3.24
339	474	340	475	340	475

(5)GPA の推移

次に GPA をみて見よう。各卒業年と男女別に GPA の平均値をまとめてみた。これは成績使用許可を得た学生の卒業時の最終 GPA を使用して集計している。この平均は 2013 年卒が最も高い。2013 年の卒業生に比べて平均値に有意に差があるのは、2014 年・16 年卒である。また図表の右 2 列は男女別の GPA の平均値を記載した。そうすると、どの学年においても女子の方が成績が高いことが分かる。先ほど見たように、能力獲得の自己評価は平均値を見ると、女子より男子の方が高い。だが実際の成績を見ると、女子の方が男子より高いのだ。男子は女子に比べ自己評価が高くなりがちなことがわかる。

図表 12　卒業年別 GPA 平均比較

卒業年	GPA	最低	最高	標準偏差	回答者数	男子	女子
2013	2.51	1.58	3.37	0.44	153	2.42	2.57
2014	2.36**	1.32	3.26	0.43	127	2.34	2.37
2015	2.39	1.12	3.38	0.41	153	2.31	2.43
2016	2.38**	1.23	3.29	0.43	153	2.26	2.49
2017	2.4	1.42	3.52	0.42	155	2.23	2.49
総計	2.41	1.12	3.52	0.43	741	2.31	2.47

（注）2013 年卒より 2014・16 年卒が有意に GPA 平均が低い

さらに入学時の志望度に応じて GPA の平均を見てみると、国公立志望であったが、CUBE に来た者の GPA が良くなっている。やはり高校時代に国公立の受験に向けて、多くの科目を幅広く勉強した蓄積や経験が、大学においても「どう勉強するといいのか」という、勉強に対する基本姿勢を形成しているのだろう。ただし、一般入試や AO 入試か指定校推薦かといった入学時の入試別でみた場合は GPA に統計的な差は見出されなかった。

図表 13　志望度別 GPA 平均比較

第一志望	2.4	1.35	3.38	0.43	374
国公立志望	2.55**	1.12	3.52	0.43	113
他私立志望	2.35	1.23	3.28	0.41	245

（注）国公立志望者が他の志願者に比べ有意に GPA が高い

(6)進路や企業選びに影響を受けたもの

それでは今まで見てきたように、授業に取り組んできた学生たちは、将来の進路や仕事などを選ぶのに、どのような事柄が影響を与えただろうか。学部での授業や教員との交流は、学生たちが自分の将来を考えるのに有効な材料を与えただろうか。そこで、卒業生には「あなたが就職先の業務・企業・仕事を選択する際に、次の事柄はどれくらい影響を与えましたか」と聞いてみた。

事柄は、「a.リベラルアーツ・語学の講義や教員」、「b.専門教育の講義や教員」、「c.プロジェクト科目」、「d.卒業研究プロジェクト」、「e.インターンシップ」、「f.部活・サークル活動」、「g.大学教員との交流」、「h.友人や恋人の助言」、「i.親の助言や意向」などについてである。学生の選択肢は 5 つであり、「とても影響した」、「ある程度影響した」、「あまり影響していない」、「影響してない」、「経験していない」の 5 つである。

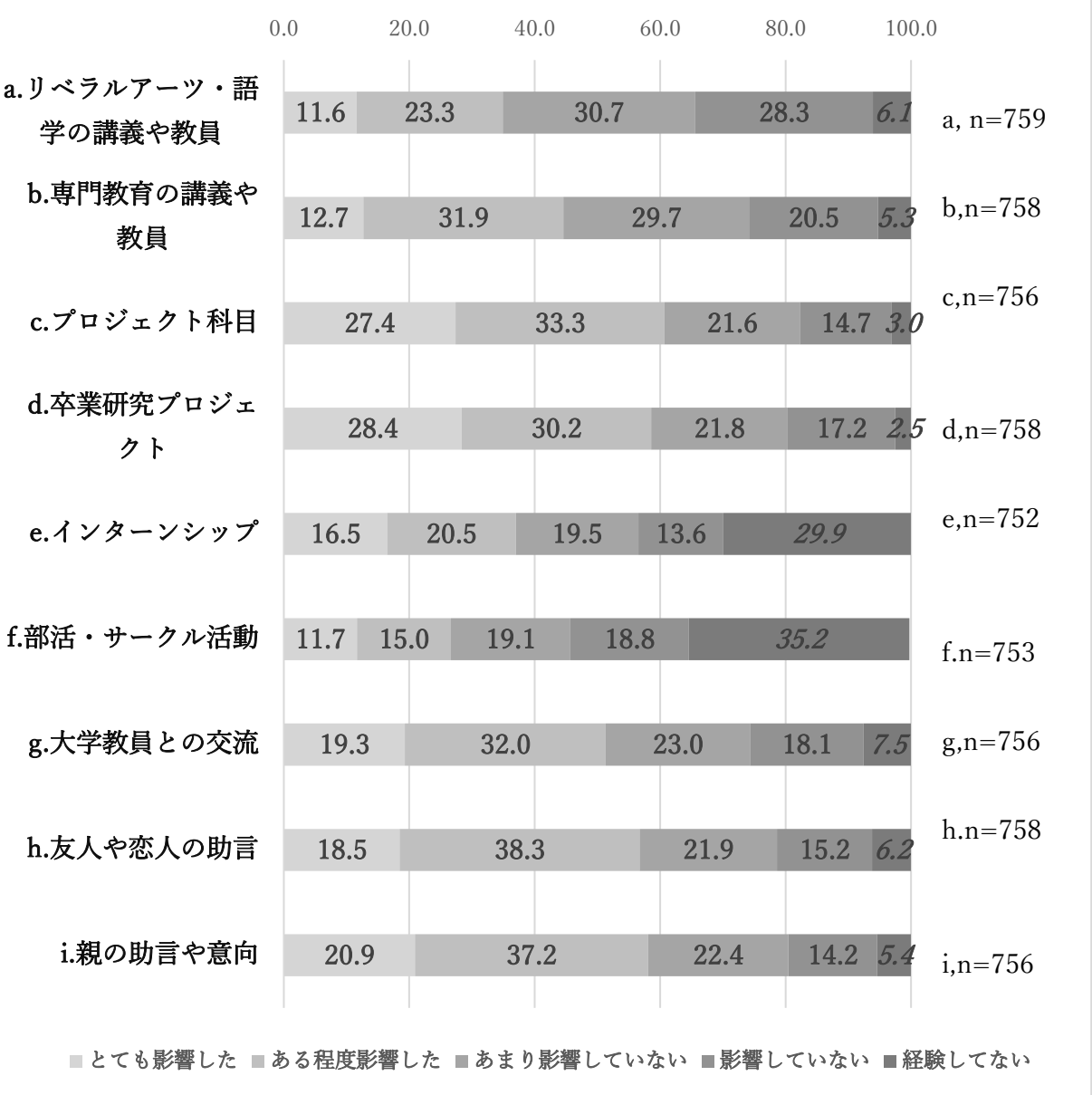
順にみて見よう。基本的にこれに関しても、インターンシップ以外は卒業年によって差が出ているわけではない（インターンシップに関しては、経験率が増加しているので、それについては後述する）。そこで、5 年間の総計でみてみよう。

例えば「a.リベラルアーツ・語学の科目や教員」が「とても影響した」者が 11.6%、「ある程度影響した」者が 23.3%となっており、2 つを合わせると約 35%、「ｂ.専門教育」は同順で 12.7%、31.9%で合わせて約 45%、「ｃ.プロジェクト科目」が 27.4%と 33.3%で約 61%、「d.卒業研究」が 28.4%と 30.1%で約 59%、インターンシップが 16.3%と 20.3%で合わせて約 38%となっている。CUBE の場合、1 年生は必修で忙しいことや岡本キャンパスから遠いこともあり、「f.部活・サークル活動」は「経験していない」が 35.2%である。「g.大学教員との交流」は 19.3%と 32.0%で合わせて約 51%、「h.友人や恋人の助言」は 18.5%と 38.3%で合わせて約 57%、「i.親の助言や意向」が 20.9%と 37.2%で合わせて約 58%である。

つまり「h.友人や恋人の助言」、「i.親の助言や意向」は 6 割近いが、「ｃプロジェクト科目」や「d.卒業研究」も同じように 6 割前後である。大学での卒論やプロジェクトという学びも、

また学生たちにとって、自分の進路を考える材料を提供しているということだろう。

図表 14　進路選択に,それぞれの事柄がどの程度影響を与えたのかの分布

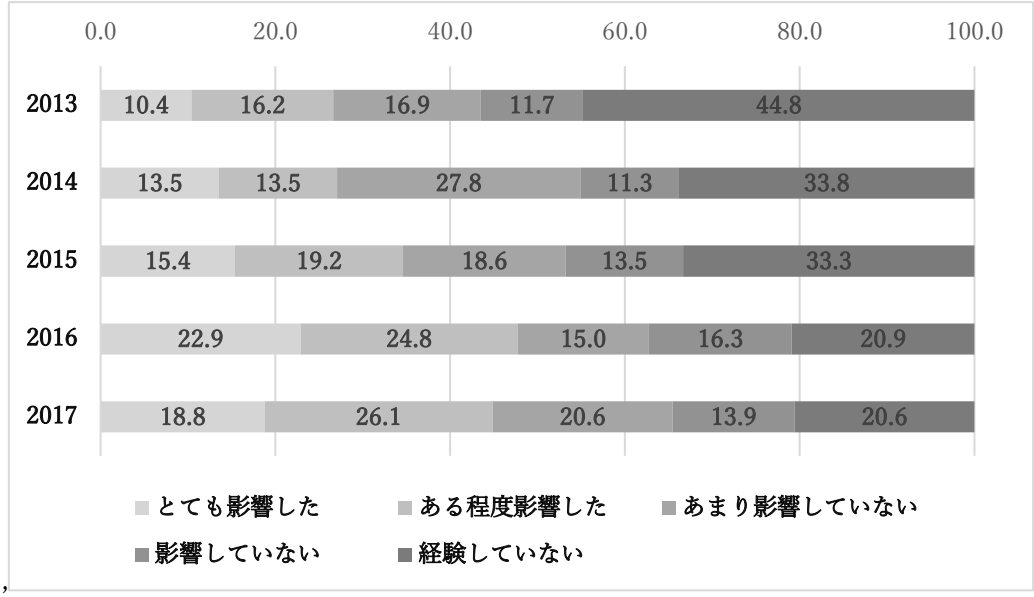


それでは、いま見てきた「あなたが就職先の業務・企業・仕事を選択する際に、次の事柄はどれくらい影響を与えましたか」という質問に対する回答のインターンシップに関する経年変化を取り上げてみてみよう。図表 15 に卒業年毎の答えをまとめてみた。

これをみると、インターンシップを経験していない者が 2013 年卒では 44.8%であったが、それが毎年減少し、2016 年卒では 20.9%、2017 年卒では 20.6%となっている。逆に言うと、それだけ経験者が増えているということである。

またインターンシップには学校経由のものと学生が自由に就職活動サイトなどから申し込むものとがある。学校経由のインターンシップの提供数は増えてはいるものの、それほど変動していないため、学生たちの中で就職活動のサイトから自由に応募して参加している者が増えていると考えられる。特に正式の採用活動が 8 月 1 日に解禁であった 2016 年卒から、企業も学生も互いに接触する機会を求めてインターンシップが活発化したと言われている。その傾向がこの結果からも読み取ることができる。

図表 15　インターンシップ経験への評価の変化



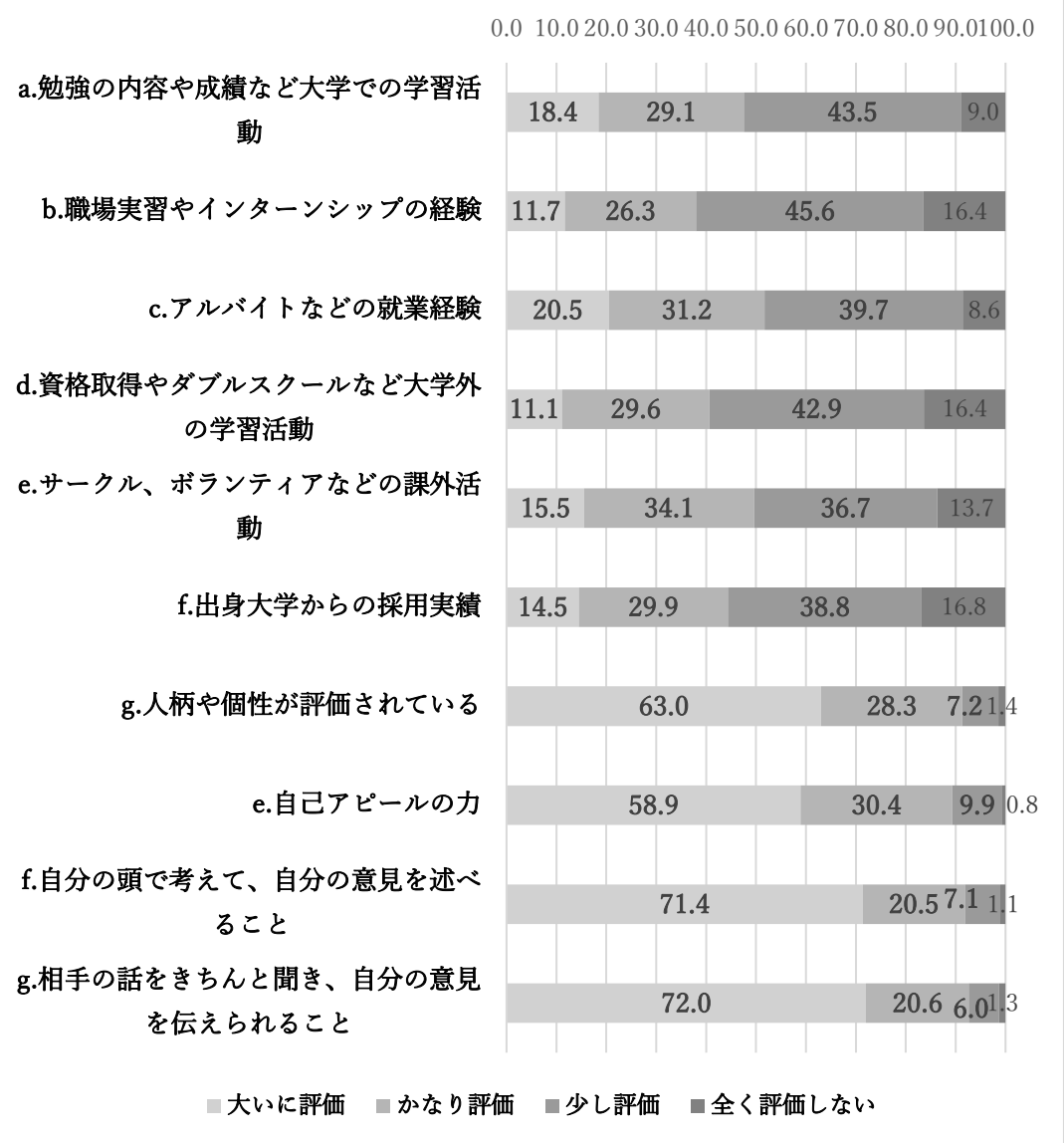
,,,

（7）就職の際に評価されていると感じたこと

次に実際に就職活動をした卒業生に「企業が大学生を採用する際に次の事柄をどの程度評価しているとお考えですか」と聞いてみた。聞いている項目は「a.勉強の内容や成績など大学での学習活動」、「b.職場実習やインターンシップの経験」、「c.アルバイトなどの就業経験」、「d.資格取得やダブルスクールなど大学外の学習活動」、「e.サークル・ボランティアなどの課外活動」、「f.出身大学からの採用実績」、「g.人柄や個性」、「h.自己アピールの力」、「i.自分の頭で考えて、自分の意見を述べること」、「j.相手の話をきちんと聞き、自分の意見を伝えられること」であり、それに対して「大いに評価」、「かなり評価」、「少し評価」、「全く評価しない」という選択肢を選んでもらった。これは就職活動をしてきた中で、学生自身が「企業が学生のどこを評価しているのか」について、自分なりに感じたことを聞いたものである。

結果は図表 16 にまとめた。

図表 16　企業が大学生を採用する際に次の事柄をどの程度評価していると考えたか



そうすると、就職活動を経た学生の受け止め方は、アルバイトや資格などよりも、「g.人柄や個性」であるが、「i.自分の頭で考えて、自分の意見を述べること」や「j.相手の話をきちんと聞き、自分の意見を伝えられること」という能力を 7 割もの企業が「大いに評価している」という。つまり、これは学生たちが「自分たちはそれができた」そして、「その能力を企業が評価してくれた」、と感じ取れたということかもしれない。

先に図表 10 でみた、大学で向上した知識や技能への自己評価を思い出してみよう。CUBE の卒業生たちが大学で向上した能力、として挙げているのが、まさに、この「a.自分の主張について根拠に基づいて関係な文章を書く能力」と「b.自分の考えや意見を人にわかりやすく伝える能力」であった。この能力は単に就職活動に必要だということではない。社会で生きていくのに欠かせない能力でもある。

（8）自由記述から

それでは最後に卒業生が CUBE のどんなところ良かったと評価しているのかを、自由記述からみて見よう。学部への満足度を聞き出したのが 2015 年 3 月の卒業生であったように、学部の「良かったところ」を自由記述で回答してもらうようになったのも、同年からである。つまり、2015･16･17 年卒の 3 年間の卒業生の回答である。

自由記述欄に良い点について回答を記入しているのは、各卒業生で 70 人強、3 学年合わせて 221 人である。うち、最も多く、63 人の者が指摘しているのが「教員との距離が近い」ことである。「教員との距離が近い」と書いた者の半分は、周りの学生との距離の近さも評価している。次に多いのが「少人数のプロジェクト」への評価である。少人数で様々なテーマを幅広く学べるのが良かったということである。3 番目に評価されているのが「ディスカッションやプレゼンの多さ」である。先のプロジェクトも少人数であるため、自分たちで考えて発表せねばならず、受け身でない授業が良かった、という意見である。

4 番目は、「留学の機会や英語の授業が充実している」ということであり、留学前の TOEFL 特訓講座やネイティブの授業が良かったという意見が挙げられている。またフィールドワークやエリアスタディーズも評価が高い。これもはやはり、学部が提供している様々なチャンスをとらえて、積極的にトライした者とそうでない者との差が出ていると思われる。

一方で、「どこを改善すればよいか」という点も聞いている。最も多いのは、教室などの施設の狭さや食堂などへの不満である。また、他の学生が「良い点だ」と評価している CUBE の特徴を評価しない者も少数だがいる。「他の学生との距離が近い」ということは、「人間関係が閉鎖的」と書いている者が一名おり、「半年ごとにテーマが変わるプロジェクトより、専門的な一つのテーマを学び続けるほうが良い」という者が数名いる。英語も「2 年生の前期で必修の英語が終わるのが良くない」という者もいるし、「学ぶ意欲の無い学生と差が大きい」、「他の学生の私語」が良くないと書いている者もいる。また岡本から離れていることからサークル活動にあまり参加できないことを不満に思う者もいるが、実は、一方で、サークル活動があまりないため、「勉強に集中できてよかった」と書いている者もいる。また「文章を書く特訓をもっとしたほうが良い」という提案もあった。

与えられることに慣れ、受け身の学生、自ら動こうとしない学生には、少人数で発表や発言を避けられない環境は辛い学部であり、提供されている様々なチャンスに気づくこともないだろう。ぞれぞれの学生には大学への志向性や求めるものの違いがあるため、全員を満足させるのは不可能である。

ある卒業生は「前向きに学ぼうとする学生には、チャンスがいっぱいあるところ」と記述している。すべての学生のニーズに答えることは難しい。むしろ、CUBE の少人数教育やプロジェクト型学習、フィールドワークなど他にはないチャンスがあるものの、それは自ら動かないと得られないこと。さらに勉強の負荷が強く、サークル活動などはしにくいなど CUBE の学びの特徴を高校生に明確に伝え、ミスマッチを防ぐことが重要だと思われる。

（この調査は科研費「大学生の職業意識の涵養と就業継続支援における大学と企業の役割」（2014～2016 年度）の助成を受けて実施された。深謝申し上げたい。）

参考文献

小杉礼子編『大学生の就職とキャリア--普通の就活・個別の支援』勁草書房

佐藤一磨・梅崎修・上西充子・中野貴之（2013）「新卒需要の変動と就活の結果」『教育効果の実証』日本評論社 pp111-132

曽和利光（2014）『就活後ろ倒しの衝撃』東洋経済新報社

筒井美紀（2010）「中堅女子大生の就職活動プロセス－活動期間と内定獲得時期の規定要因」苅谷剛彦・本田由紀編『大卒就職の社会学』東京大学出版会、pp107-128

同志社大学社会学部・大学院社会学研究科　教育 GP 評価委員会

（2011）『第 2 回社会学部卒業生アンケートの調査報告書』

（2012）『第 3 回社会学部卒業生アンケートの調査報告書』

上記調査は平成 20 年度文部科学省教育 GP 採択事業「相互啓発による創造的学力育成カリキュラムの一環として実施されている。

http://ssgp.doshisha.ac.jp/questionnaire/questionnaire.html

労働政策研究・研修機構(2007)『大学生と就職―職業への移行支援と人材育成の視点からの検討』労働研究所報告書　No.78